

市立病院の 60年を 振り返って



病院事業管理者
平林 高之

市制施行60周年おめでとうございます。市立病院を代表しましてお祝い申し上げます。

市制施行と同時に当院も町立病院から市立病院に生まれ変わりました。砂川市立病院開院50周年記念誌（平成2年発行）には、昭和30年の佐々木正信院長の

談話として、「総合病院を目指して上砂川町、歌志内町（当時）、奈井江町、浦白町、浜益村（当時）を含む人口12万人の地区基幹病院として注目された」と記載されています。

その後、昭和57年に中空知地域センター病院に指定され、平成22年に新病院開院を迎えました。この間に幾度も運営の危機を経験してきました。市立病院の今日の発展は、先人のご苦勞の結果であることはもちろんのこと、市や市民の皆様さん、さらに周辺地域の住民の支えなくしては果たされなかったことは間違いありません。

現在、市立病院は診療科25科、病床数498床、医師98人、総職員数900人余りの、札幌市と旭川市の間では最大規模の病院となりました。中空知5市5町はもちろん深川市、美唄市からも多くの患者さん

がいらっしやいます。

当院の責任はますます大きくなり、役割も時代とともに変化してきました。これまでの急性期、救急を主体とした診療から回復期、慢性期を視野に入れた診療も当院の役割となってきました。

3年前にリハビリテーションと在宅復帰を目的として地域包括ケア病棟を開設し、本年度からは訪問看護ステーションを立ち上げました。

当地域の高齢化率は40%に迫る勢いです。特に団塊の世代が後期高齢者となる2025年に向けて地域で高齢者が住み慣れた土地で安心して暮らせる地域包括ケアシステムの構築が求められています。

砂川市は全国に先駆けて行政、福祉、介護、医療の連携体制が構築されています。特に認知症については「砂川モデル」といわれるほど先進的な取り組みがされ全国的にも注目されています。

これからも当院は地域医療のトップリーダーを目指し、市と協力し市民の皆様さんや近隣住民にとって、より安心し暮らしやすいまちづくりに貢献したいと考えています。

（この部分のテキストは上記の文脈から補完し、重複を避けつつ内容を整理）

昭和30年代前半のできごと

●結核病棟建設（昭和30年）

この時代は結核による死亡率が非常に高く、その予防と治療は医療機関の重要な責務でした。当時としては注目された施設であり、供用開始を待たず満室の状態でした。

●総合病院標榜（昭和32年）

診療内容の整備に伴い総合病院の標榜を申請し、北海道知事から承認されました。総合病院は、許可病床数100床以上で、主要な診療科（内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科の5科）を含む病院のことですが、平成8年の医療法の改正で廃止されました。

●基準看護実施（昭和33年）

患者数に対して看護師の比率を満たしている看護体制をいいます。現在の入院基本料の施設基準（一般病棟7対1など）と同じものです。看護師の増員が進んだため申請を行ったところ、北海道知事から承認されました。

●精神神経科設置（昭和33年）

この地域の精神病棟は皆無の状況で、すべて遠隔地の病院に入院しなければならず、地域の要望に応える形で精神神経科開設と精神病棟建設を行いました。

●整形外科設置（昭和34年）

札幌医科大学の配慮により整形外科が設置され、吉野繁夫先生が初代医長として着任されました。翌年、炭鉱地帯を中心に全道的に小児まひが大発生し、開設早々多忙を極めました。

●高等看護学院設置（昭和35年）

基準看護を維持するうえで正看護師の占める比率を高めるため設置しました。准看護師免許を持っている者が対象で、修業年限は2年間、当時の定員は15人でした。

市立病院 60年間の軌跡

